英国旅行作家イザベラ・バードが見た明治初期の建築
―日本嗜好の理解として―

建築史・建築論研究室　塩田　航

序章

1.研究背景・対象

19 世紀後半～20 世紀初頭において最も著名な日本研究家バジル・ホール・チェンバレン。彼は当時の日本辞典とも呼べる「日本事物誌」(1890)の中で次の言葉を残している。

「古い日本は妖精の住む小さくて可愛らしいふしぎの国であった。」

この記述から、明治初期の日本に訪れた人物が、当時何を見ていたのか興味を抱くようになった。

幕末から明治にかけてさまざまな外国人が、日本を訪れ、当時の日本の様相を表す多くの記述を残している。E・S・モースという人物は、生物研究の傍ら日本各地をめぐり、熟達したスケッチとともに日本の家屋を隅々まで観察し、「日本の住まい」(1886)を出版した。現在でも貴重な文献である。

さて、同時代の異邦人に、イザベラ・バードという人物がいる。英国の著名な女性旅行作家であり、慈善家であるバードは、1878 年(明治 11 年)に日本に来訪する。その後 7 ヶ月間に渡り日本を旅し、日本人の生活や風習、調度品から民家、都市に至るまで、様々な記述を”Unbeaten Tracks in Japan”という本にまとめた。本研究での研究対象である。

2.研究目的

当時の異邦人が残した記述は、現在では当時の様子を今に伝える資料として用いられているが、前述したモースの図書は例外として、建築という観点から考察を試みた研究は少ない。この研究での目的は、バードという建築系専門家ではないが著名な旅行家が、当時の日本の建築を観察し、記述した内容から、何が読み取れるのかを考える。

3.先行研究

この研究におけるバードの記述の考察に関して、国内外含め最も素晴らしい研究、翻訳をしている金坂清則氏の研究を基底とする。”Unbeaten Tracks in Japan”の訳本は、金坂氏以外にも存在するが、それらのほとんどが 1 巻本の簡略版であり、原版である 2 巻本の内容を大きく削ってしまったものとなっている。従って、記述の引用は全て金坂清則訳「完訳　日本奥地紀行 1-4」からとする。

4.記述の収集基準

対象とする著書は研究書ではないため、例えば「建築」といった項目があるわけではない。ゆえに、この研究の中心であるバードの豊富な記述は全て参照するものの、とりわけ以下の 3 つに私が分類する記述は注目するべきである。

1．当時の日本における都市や町の概観、種々の建築の外観から内部に至るまでの観察、建築の構造など、網羅的に収集する。
2．「日本的である」や「純日本的」などの記述。
3．「妖精」や「おとぎの国」などといった表現。

2,3 は特に、当時の世相(後述)との関わりの中で重要な記述である。

1 章　イザベラ・バード日本旅行の背景

この章では、研究対象であるバードと日本の旅に関する背景諸相を捉える。基本的にはバードの主観的な記述であるので、それを研究するにあたっては、バードという人物を形作る内的・外的要素を考えなくてはならない。

1 節　イザベラ・バードの個人的背景

バードはどのような人物で、どのような経緯で日本を訪れたのだろうか。

1831 年、イングランド北部の裕福な家庭の長女として生まれた。3 つ下の妹ヘンリエッタとイザベ

ラは、共に病弱な身体で生まれた。不憫に思った牧師の父親から様々な教育を受けたイザベラは、22 歳で経験する海外旅行を機に、旅行作家として頭角を現す。晩年には、最も著名な旅行作家の一人として知られており、同時に、スラムの改善活動や病院の設立など、慈善家としても知られていた。

イザベラ・バード

バードの旅と紀行文の目的は、基本的に 3 つあった。(1)キリスト教伝道の視察、(2)病弱な妹への経験談、(3)旅先では自身の病状が改善するゆえの療養目的である。日本への旅も、これらの目的は根底にあり、更に、西洋化をすすめる東洋のなかで、より独自の文化を保持している日本に興味を持ったということもある。原著の”Unbeaten Tracks”直訳で「未踏の道」には、西洋化の影響が少ない道を進みたいというバードの意図が表れている。

左から原版　簡略版　新版

2 節　時代的背景

バードが訪れた 1878 年とは、どのような世相であっただろうか。

当時の異邦人たちに通底しているのは、ジャポニズムと言われる日本嗜好であるだろう。19 世紀後半から始まった運動で、当時の欧米において、日本の工芸品の収集や、様々な芸術分野などで日本芸術の引用などが見られる。東洋に対するある種羨望の眼差しが、日本にも向いていたのである。

また、18 世紀半ばから徐々に欧米に広がっていった産業革命がもたらした物質社会の反動が、チェンバレンをはじめとする多くの異邦人が口にする「妖精」や「おとぎの国」といった表現に表れていると思われる。古くよりある、牧歌的な、自然豊かな風景、不思議で華奢でかわいらしい様子など、これらの情景の希求である。

2 章　バードの旅と記述

1 章を踏まえて、バードの記述を追う。この時、収集基準は上記のとおりであるが、それらの記述を記述の性格別に、

(1)伝道拠点

(2)道中

(3)行楽地

として分類する。右図はバードの旅における地名等を列挙したものであり、東北・蝦夷での旅と、伊勢参りのおおまかな順路がわかる。赤点は伝道拠点、青点は道中、緑点は行楽地を示している。

日本の旅

1 節　伝道拠点

伝道拠点は、旅における最も重要な地域である。長く滞在するこれらの拠点において、バードの旅に通底する伝道視察という目的が、顕著に現れる場所である。また、いずれも開港場を近くに有しており、さまざまな西洋化の様子を伺うことができる。いくつか記述を引用しながら、バードが何を見ているのか考察する。

「東京と新時代の建築的には、…(一部例外を除けば)品のない欧米式の木造建築物で、白いペンキを塗り長方形のガラス窓をふんだんに用い、通常はベランダがない。…建物というよりも砂糖菓子だという方が良い代物である。…日本政府は新しい首都をこのように俗悪なものにし、…この都市を東洋都市よりもシカゴやメルボルンの場末を思わせるような都市にしてしまった。このことは明白である。」*1

この記述を見ると、ジャポニズム的讃美どころか、非常に批判的である。バードの目的は、日本の西

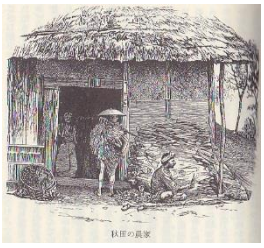
洋化する以前の姿であったために、「まがいもの」の西洋化をすすめる都市を、いくつか考慮する点はあると踏まえながらも、厳しい目を向けている。

新潟でも、その様子を窺い知れる。

「西欧化という形で展開し始めている新潟の官公庁地区は、純日本的な旧市街と比べると全く見劣りする。旧市街は…清潔で絵のように美しい町…おとぎの国を眺めているような気分になる」*2

見事な対比である。バードが何を見たかったのかがよくわかる。また、このような讃美は、バードの記述の中では数少ない例である。

2節　道中



挿絵　秋田の農家

次に、道中の記述である。「未踏の地」とはあくまで外国人にとってであって、バードの旅は主に江戸の参勤交代などで発展した街道と宿駅を用いている。主要地に比べると、各地ごとの記述は少ないが、バードが望んでいた「未踏の地」であった。

「この町の様子はみすぼらしい。家はつぎはぎだらけで、支柱で支えられたりしている。」*3

「農村の様子はどんどんひどいものになっていった。家はいい加減な土壁がむき出しになり、側面にはあちこちに隙間があって、光が入ったり煙が出て行ったりするようになっている。壁と言っても、たくさんの樹皮と藁束を藁縄で柱に結びつけただけという家もある。」*4

これらは東北・羽州街道での記述である。開港場の外を自由に出歩ける許可を得ている異邦人は、当時ごく僅かであり、また、多くは日本人にすら知られていない道を進んだバードは、貧しく汚れている集落を多数通った。バードがおもわず、文明化した日本なのだろうかと疑問に思うほどであった。とはいえ、次の記述

「今まで板葺きだった屋根が茅葺きになったこともあり、村の佇まいはぐんとよく…急勾配の屋根、深い庇、縁側、温かい枯葉色の屋根と壁を持つ農家が…風変わりに佇む」*5

とあるように、牧歌的で温かみある集落も多数記述されている。それぞれ、背景は異なるが、貧しい集落に共通しているのは、戊辰戦争の影響が合ったとみられる。また、城下町などは、廃藩置県によって城下町の屋敷がそのまま朽ちていくままにされていることで、沈んだ雰囲気を呈している共通点も記述から読み取れる。

また、バードの宿泊した宿は 30 以上にもなり、全てが特定できるわけではないが、原則としてその場の最も立派な宿をとっている。

3節　行楽地

挿絵　鎌倉建長寺の山門

最後の分類は行楽地である。主に、東京の増上寺や浅草寺、日光と伊勢神宮である。

「『きらびやかなる東洋』という名言が日本で当てはまるのは、ごく少数の寺院についてだけである。」*6

バードが期待していた日本のイメージが見て取れる。日本の都市が概して色彩に乏しく、みすぼらしいと言及するのに対して、上記のような有数の寺社周辺については、その観察眼と表現力で豊富かつ詳細な記述と賞賛が記述されている。

「家が小さくて低い上に、素晴らしい畳が敷かれ、実に清潔で、度が過ぎるほどにきちんとし、軽やかで華奢なので、まるで人形の町通りである。」*7

「小さくて可愛らしい町…古風な趣のある全てのものと調和して一つになっている。…妖精が造ったような部屋…」*8

3章　バードとジャポニズム

2 章では、建築に関する記述を 3 つの性格の場所に分類し、膨大な記述のほんの一部分ではあるが、どのようなことを言っているのか、旅の性質も含めて見てきた。これを踏まえてこの章では、ジャポニズムとバードの関係を考えてみる。

1 節　独自の観察

「もし私が、外国人がもっと短時間で訪れる日光・箱根・宮ノ下などのような場所にじっとしていたなら、非常に違う印象をもったであろう。」*9 とバードが記述しているように、バードの旅は「未踏の地」を進んだという明確な差異があった。既に著名な作家であったバードは、当時の英国公使の図らいで、その道を進めたということは大きな特徴である。2 章で取り上げた道中は、バードにしか記述できないものであった。都市に関しても前述のように、西洋化していく町に対しての記述というのは稀である。ただし、行楽地に関してはそれまで多くの異邦人の観察と、基本的には変わらないといえる。実際バード自身も行楽地に関して豊富な記述を残しながらも、すでに多くの書があるので、取り立てて言うこともないと語っている。

2 節　日本が演出する「日本」

ここで、1867 年のフィラデルフィア万博について少し言及したい。畑智子さんの研究では、この万博において 10 人の棟梁含む日本の大工が現地に赴き、日本建築を建設・展示したことと、それによって明治政府が示したかった「日本」というイメージが創られていたとする。国内では西洋化を進めながら、西洋人に向けて発信する「日本」というのはジャポニズムに応じたものであった。万博で展示された建築には、日本にはない方法で華美に装飾されていたという。幕末でも、外国人が訪れる通りでは、庶民が幕吏によって清掃が命ぜられるなど、日本をより良く見せることでの「地位の向上」を図るという意思が強くあった。

結章

本研究では、イザベラ・バードという人物がどのような背景で、明治 11 年の日本を見ていたのかを通して、都市や建築がどのような記述によって観察されていたのか分析した。その結果、2 章の分類によって見て取れる記述は、3 章の内容を踏まえると次のことが言えるのではないか。

（1）バードの行楽地での記述は、ジャポニズム的日本の表れである。

（2）道中に見る「日本」は、ジャポニズムではないが、今日の人が思う「日本らしさ」である。

奢侈なジャポニズム的日本ではなく、裕福でなくとも素朴で精神的な豊かさを享受していた道中の人たちの情景こそ、今の「日本」と言えるのではないだろうか。

また、都市の観察に関しては、西洋化していく都市の観察として、明治の急速な都市の変容の文脈のなかに落とし込めたなら、貴重な傍証となるだろう。この研究ではそれが出来なかったのは、バードの記述を読み取ろうとする上で一つの課題である。また、更により多くの異邦人の記述を収集できれば、また違う「日本」が見えてくるに違いない。

注　凡例：[(巻数)-(項数)]　…中略
*1：[1-65・66] *2：[2-41・42] *3：[2-189] *4：[2-243] *5：[1-207] *6：[2-45] *7：[1-142] *8：[4-111] *9：[1-236]

引用・参考文献

本文・挿絵：イザベラ・バード著　金坂清則訳「完訳　日本奥地紀行 1-4」平凡社
エドワード・S・モース著　斎藤正二・藤本周一訳「日本の住まい」八坂書房
渡辺京二「逝きし世の面影」平凡社
街道の日本史 3「津軽・松前と海の道」長谷川成一編　吉川弘文館
街道の日本史 9「北秋田と羽州街道」佐々木潤之介・佐藤守・板橋範芳編　吉川弘文館
街道の日本史 10「雄物川と金比羅道」木原博幸・和田仁編　吉川弘文館
街道の日本史 11「最上川と羽州浜街道」横山昭男編　吉川弘文館
街道の日本史 12「会津諸街道と奥州道中」安在邦夫・田崎公司編　吉川弘文館
街道の日本史 15「日光道中と那須野ヶ原」阿部昭編　吉川弘文館
畑智子「1876 年フィラデルフィア万国博覧会の建築に見る『日本』」